

建学の精神と同志社小学校の教育

奥野 博行

奨励者紹介[おくの・ひろゆき]

同志社小学校副校長

はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

(ヨハネによる福音書 12章 24節)

新島襄海外渡航の地にて

1864年(元治元年)6月、騒然とした世情にあってなお、学問への熱い志と未知の国への強い思いに駆られてやまなかった一人の若者が、国禁を破ってひそかに日本から脱出をしました。今から147年前のことです。アメリカではまだ南北戦争が続いている、そんな時代でした。

翌年、ボストンに着いた若者は、様々な人びととの出会いに恵まれ、新しい知識を学ぶ機会を得ます。それから約10年の後、心に刻んだキリスト教精神、アメリカで触れた文化、学んだ学問などによって、新たな生き方を自らのものとした青年・新島襄は、大きな志を胸に日本に帰国しました。そして帰国の翌年、1875年11月29日、同志社英学校を創立し、教育者としての第一歩を踏み出すこととなります。この夏休みの8月26日、私は同志社小学校の5年生90名とともに、147年前、21歳の新島襄が見果てぬ夢を抱いてベルリン号に乗り込んだ地・函館の港に建立されている「新島襄海外渡航の地碑」を訪れ、祈りのときをもちました。

毎年、5年生は、宿泊体験学習の一環としてこの地を訪れることにしているのですが、今年も宿泊体験学習の3日目、地碑の前に立ち、「高い理想に燃えた若き新島先生が、その夢を叶えるべくアメリカに向かってこの地から出発をしました。まさに、同志社の原点がここにあるのです…」と子どもたちに話しながら、改めて同志社精神について、また、新島に連なる学校として歩むべき道について、考えずにはいられませんでした。

小学校の開講準備に際して

私がチャペル・アワーでメッセージ(奨励)を担当いたしますのは、今回が2度目です。1度目は同志社小学校が開校して間もない2006年5月のことでした。そして、そのとき、1年生だった子ども達が6年生となり、小学校としての一つのサイクルを迎えた節目の今年、再び話をするようにとのお声掛けをいただきました。「創立記念礼拝」としての位置づけも兼ねたメッセージを、とのことでしたので、考えた末に、小学校設置準備室の頃から今日までの同志社小学校の歩みや教育実践、そして、そこに込めた願いにつきましてお話しさせていただくこととしました。そのことにより、これからの小学校教育の在りようについて確認をしていきたいと考えたからです。

ところで、今日、まさにこの時間、小学校では、アドベントの行事の一つであります点灯式を、ほぼ全員の児童と保護者との参加で行っています。先ほど、宿泊体験学習の話をしてきましたが、このような

宿泊体験学習や今行われています点灯式など、小学校の開校に向け、どのような行事を行っていくかと様々に構想を練っていた小学校設置準備室時代のことが、つい昨日のこのように思い出されます。

開校前年の4月、小学校設置準備室の陣容は、当時企画部長であり商学部教授で現校長の森田雅憲設置準備室長、現在心理学部長で前校長である鈴木直人心理学部教授、現在図書館の事務長で、当時企画課長であった井上正則課長の3人が、大学の仕事を兼務しながら設置準備の仕事にかかわっておられました。準備室の専任者としては、現司法研究科係長の瀬川貴之事務係長、門上志保事務係員、そして、5名の専任の小学校教員でした。

設置準備室に着任した私も含めた5名の小学校教員は、どのようなペースで備品や消耗品を揃え、カリキュラムのどこに特色をもたせ、どこに視点を当てながら校舎建築にかかわり、学校全体のデザインをどのように描いていけばいいのかなかなか見当もつかぬままに、机上に置かれた新島襄や同志社にまつわる書籍に眼を通すのみといった日を、1カ月近く続けたように思います。1カ月というのは少し大げさかもしれませんが、開校を1年後に控え、「何か形あることをしなければ」と気持ちは焦りつつも、しかし、何をすべきかが見えて来ず、無為に日々を過ごしてしまっていると感じている当事者にとっては、かなりの長い期間のように思われたのです。しかし、今振り返ってみますと、新島自身やその周りの人びとの言葉を、また長い歴史のなかで発酵し、同志社スピリットとして法人内の各学校に脈々と流れ伝わる「精神」を、そのようにじっくりと見つめ、とらえ直す機会がもてたことは、何物にも替えがたい意味のあることでした。具体的な教育内容づくりの段階に入ったとき、そのモラトリアムの期間に学んだ新島の教育への熱い思いや願いが、同志社小学校の「教育指針」として、私たちを導いてくれることとなりました。

恥ずかしい話ですが、私自身は、それまで新島襄や同志社について学んだことが殆どなく、学生時代、当時同志社総長でいらっしゃった住谷悦治先生が、高潔で滋味あふれる文章で著された随想「同志社の一隅から」（法律文化社）を読み、その中に書かれた新島に関する逸話や、同志社への愛情あふれる思いに触れ、断片的な知識を得たことはありましたが、別の言い方をすればそれがすべてであり、まことに漠たる知識しかもっていませんでした。準備室への赴任が決まって、慌てて自宅の屋根裏から30数年ぶりにその本を引っ張り出し、改めて読み直した次第でしたが、準備室のほかの先生方も似たり寄ったりの状態ではなかったかと思っています。

「同志社らしい小学校を創ってください。同志社でなければ出来ない学校を創ってください。他のどこにでもあるような学校を創るのなら、同志社が小学校を創る意味がありません。法人として、大学として小学校を設置するのですが、同志社らしさというものが何であるかまでをも含めて先生方で考え討議していただいて、より良いものを創りたいと思っています。細かな教育内容については、全面的に先生方を信頼しお任せします」。

それが、森田室長の設置準備室運営方針でした。認可申請にかかわることや、他部門との折衝、連絡調整といった事柄については、大学当局が責任をもってやるけれど、教育内容は、教員ベースでの仕事であり、小学校教員予定者が責任をもって自由かつ大胆に計画して欲しいとの、「自由」と「責任」を重んじる同志社らしい言葉を受け、教育課程づくり、教育内容の検討が始まりました。

新島襄ならばどうしたか

キリスト教主義・自由主義・国際主義の三つの教育理念にとどまらず、同志社に残る数々の言葉、法人内の諸学校に息づく文化……そのようなものを手がかりに「同志社らしい小学校」の在り方、教育の創造について議論をし、「学校案内パンフレット」原稿の校正を繰り返しながら、教科・領域・学校行事・時間割などの教育課程を形づくっていきました。同時に進行中の校舎建築にも学校のコンセプトを反映させていくなど、本格的な準備がスタートしたのです。

すべての教育活動を考えていく際には、新島襄ならばどうしただろうか、同志社ならばどのような方法を採用すべきなのか、私たち教員の脳裏には常にそのことがありました。異なるバックグラウンドをもって設置準備室に着任した教員の集まりでしたが、「同志社精神」という拠(よ)って立つ確固たるものが存在し、そこに焦点を当てて教育を考えていくのですから、自ずと向かうべき方向も一致してきます。

「研ぎ澄まされた知性はよく切れるナイフに似ている」と述べ、「徳育の裏付けがあつてこそ、はじめて知性が充然たる意味を持つ」とする新島が、現代の小学校教育について考え教科学習に取り組むならば、ただ訓練的に量をこなす学習ではなく自分自身の頭で考えるような学習形態を望んだに違はなく、たとえ道の途中で間違ふことがあつたとしても、その失敗をも含めて認め励まし続けたはずだとの共通の思いは、同志社小学校の根幹をなす「道草教育」という教育理念として、位置づくことになります。このように、教育課程づくりを進めていったのですが、準備室長の森田先生の「同志社らしさ」への徹底した思い、校長予定者の鈴木先生の尽きることのない同志社への愛情、そのような二人のリーダーのこだわりがあつたればこそ、実践の方向を明確にした学校づくりが進んだのだと今にしてなお、強く思います。

小学校開校準備の2005年は、2003年のOECD(経済協力開発機構)の学力調査結果などを受けて、「脱ゆとり教育」が社会問題としてまで取り上げられ、世の中の趨勢(うせい)はいつの間にか「結果主義」の教育に逆戻りし、詰め込み主義的に「量をこなす」「知識を増やす」教育への回帰によって、直線的な学びがもてはやされている、そんな状況でした。

しかし、このような流れのなかでも、キリスト教主義教育によって、「人を植ゆる」ことに重点を置き、同志社の「良心教育」を受け継ぐ小学校にしようとの方向性に迷いが出ることはありませんでした。むしろ、同志社小学校のメッセージがどこまで理解されるのか、正直申しまして、楽しみに思う気持ちさえありました。学力をつけることは、学校教育の任務の一つですから当然のことなのですが、まず人を育て、心を育むといった教育本来の目的を忘れ、また学力の中身を吟味することもなく、まるで学校の存在価値は偏差値の高い有名学校への進学率のみにあるかのような論調ばかりが目立ちましたので、新島の言葉・教育哲学を手がかりに開校準備を進め続けている私たち準備室の教職員は、逆に、自分たちこそ教育の本来あるべき道を模索し続けているのだという自負をもつことができましたし、新しい学校だからこそ、最も新島精神を、同志社精神を、ピュアな形で引き継いだ学校にできるのではないかとの思いも密かにもっていました。

同志社小学校の教育

大雑把な言い方になりますが、教育の目的を「一人ひとりの人間が、社会のなかで人間らしく豊かに生きていく(いける)、その力を育むこと」にあると定義づけるならば、当然、知識・技能の習得は大切です。しかし、「豊かな生き方を模索し、主体的に生きる」ためには、それだけで終わるのではなく、得た知識や情報を「まとめ統合し、判断し、自分なりに方向性を見いだす力」—学びの編集力とでも言えばいいのでしょうか—そのような力が必要になってきます。つまり、最も重要なことは、得た知識や情報を取捨選択し、つなぎ合わせ、人間力として技能を活かしていく力の獲得です。同時に、人間らしくより良く生きるためには、『感性・優しさ・情緒・温かさ等』の豊かな心」といった基礎をなす部分が育っていなければ、学んだ事柄を、全体の幸せに寄与する方向でまとめたり活用したりすることは不可能です。また、学んだその時点では、無駄に見えたり失敗に終わったと思えたりするような体験ではあっても、後になって大きな意味をもつことだってあります。

人間力の基盤を育成する初等教育では、失敗、成功のどちらの体験であれ、自分自身のフィルターを通して試行錯誤するような体験、「道草体験」をくぐる必要があることや、学習活動においても、単に「答えが分かればいい、問題が解ければいい」という結果重視でなく、その学びのプロセスに目を向けることが必要なのではないかということなどを日々話し合い、そのようななかで、人間としての根幹—「根っこ」—の部分を育てること、また、様々な「道草」の活動のなかで、自らの体験を通じて認識の力を育てていくこと、そのようなことを同志社小学校の教育実践の柱にしようとの共通理解が形成され、そこに向かっての学校づくりが進んでいったのです。

同志社小学校の時間割では、公立の学校でいうところの生活科・総合的な学習の時間・特別活動の時間(学級会)などを総称して「道草(の時間)」と呼んでいます。「人・物・文化」にかかわるこの時間は、道草の理念を具体化する時間だとの考えからです。また、児童が、自分なりのテーマをもって研究をしていく一人一研究に取り組んでおり、それを「道草研究」と呼んでいます。調べ学習、自由研究なのですが、なぜ、あえて道草研究と呼ぶのか。追究し、調べ、まとめ、発表するといった一連の活動を通して、真理探究の楽しさや学びの喜び、醍醐味といったものを体得することにより、学習対象への構え、アプローチの筋道、探求し続ける姿勢など、主体的な学び方が身につく、その力が教科学習も含めたあらゆる活動の場で活かされ、知識・理解を超えた認識の力となって児童個々の学習がより質の高い深いものへとつながっていくに違いないし、そのように育てたい、そんな強い願いを込めて、道草研究と呼んでいるのです。

この他にも、本校には「同志社精神の涵養(かんよう)」「同志社人としてのアイデンティティ」にこだわった事柄がいくつもあります。たとえば、朝の礼拝です。全学年・全クラスで毎朝15分間の礼拝をまもっています。キリスト教主義教育を教育理念の最初に掲げる学校としてのこだわりです。「水が自然に染み込むように、無理をしないでゆっくりと養い育てること」という「涵養」の言葉の意味通り、初等教育の段階では、毎日、聖書や讃美歌などに触れ、その教えを、まず、感じることに意味があるのだと思っています。異年齢の縦割り活動は、新島が渡米の際に上海からボストンまで乗った船の名前から、「ワイルド・ローバー活動」と呼び、乗組員である構成員がみんなで協力し合い、かけがえのない仲間をつくっていくのです。また、クラス名は、デビス部・ハーディ部・ラーネッド部と、

同志社ゆかりの方々の名前から頂戴しています。入学してすぐの1年生は、最終学年の6年生とともに、春の仲良し遠足で、若王子に登り校祖墓参を行います。アメリカのアーモスト市とボストン市を訪れる6年生の修学旅行では、最初に、新島の母校であるアーモスト大学を訪れ、まず、新島の肖像画が正面に掲げられたジョンソン・チャペルでの礼拝を行います。その後、様々なプログラムを行うのですが、ボストンでは、新島のアメリカの父、アルフィーアス＝ハーディ（Alpheus＝Hardy）のお墓にも参ります。このように、同志社ゆかりの事物を身近に感じ取る教育環境のなかで、子どもたちは、自然に同志社精神を心に刻み、お互いの絆を固く結び合っていくことになります。

6年目に思うこと

同志社の教育理念を、小学校教育のなかに余すところなく落とし込み、最も同志社らしい学校をつくりたい、そのような願いで歩み続けて6年目となりました。そのことがどこまで実現できているのか、教育の難しさ、奥深さを感じさせられることもしばしばです。

しかしながら、私たち教職員が、同志社の建学の精神を、教育理念を、見失うことなく、それをいついかなるときも守るべき大切な道標（みちしるべ）としながら良心教育を実践していく限り、同志社小学校の校歌にありますように「ひとのいたみ かなしみみつめ ほほえんでてをつなぐ」ことを決して忘れない子どもたち、「えらいひとになるよりも よいにんげんに」なることを志して行動する子どもたち、そして、どのようなときにも明日に向かって確かな足取りで歩み続ける子どもたちが育ち、未来を切り拓いていくに違いない、そのような願いと展望とを申し述べ、メッセージいたします。

2011年11月22日 今出川火曜チャペル・アワー「創立記念礼拝奨励」記録